

摂取の心光、つねに照護したまふ。
 すでによく無明の闇を破すといへども、
 貧愛・瞋憎の雲霧、
 つねに眞実信心の天に覆へり。
 たとへば日光の雲霧に覆はるれども、
 雲霧の下あきらかにして闇なきがごとし。
 信を獲て見て敬ひ大きいに慶喜すれば、
 すなわち横に五悪趣を超截す。
 一切善悪の凡夫人、
 如来の弘誓願を聞信すれば、
 仏、広大勝解のひとつのたまへり。
 この人を分陀利華と名づく。
 弥陀仏の本願念仏は、
 邪見・驕慢の悪衆生、
 信樂受持することはなほだもつて難し。
 難のなかの難これに過ぎたるはなし。
 印度西天の論家、
 中夏（中国）・日域（日本）の高僧、
 大聖（釈尊）興世の正意を顕わし、
 如来の本誓、機に応ぜることを明かす。
 釈迦如来、楞伽山にして、
 衆のために告命したまはく、
 南天竺（南印度）に龍樹大士世に出でて、
 ことごとくよく有無の見を摧破せん。
 大乘無上の法を宣説し、
 歡喜地を証して安樂に生ぜん。

【意 訳】

摂め取るお慈悲の光は、いつも照らして護ってください。
 本願を疑う心がとれて救われた身になっても、
 貧愛・瞋憎の心は、はてしない雲霧のように、
 いつも眞実信心の上に覆っている。
 けれども、日の光は雲霧に覆われていても、
 雲霧の下は明るいように、往生一つはまちがいが無い。
 信心を得て仏を敬い、大いに喜ぶならば、
 直ちに迷界を飛び越えて、仏となるべき身となる。
 すべての善人も悪人も、
 如来の本願を聞いて信ずるならば、
 仏たちは「すぐれた法の体得者」とほめたたえ、
 「泥の中に咲く白蓮華」と称賛してください。
 阿弥陀仏の本願に誓われた念仏の法は、
 よこしまな考えや驕り高ぶる人には、
 これを信ずることは甚だむずかしい。
 難中の難で、これ以上むずかしいことはない。
 インドに出られた菩薩がた、
 中国・日本の高僧たちは、
 釈迦仏が世に出られた本意をあらわし、
 弥陀の本願はわれらがための法であると明らかにされた。
 釈迦如来は楞伽山において、
 大衆に告げて仰せられるのは、
 「南インドに龍樹という菩薩が現れて、
 有無の邪見をことごとくうち破り、
 大乘のこの上なき法を説きのべ、
 歡喜地をさとして安樂浄土に往生するであろう」と。

難行の陸路、苦しきことを顕示して、
易行の水道、樂しきことを信樂せしむ。

弥陀仏の本願を憶念すれば、

自然に即のとき必定にはいる。

ただよくつねに如来の号を称して、

大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。

天親菩薩『論』（浄土論）を造りて説かく、

無碍光如来に帰命したてまつる。

修多羅によりて真実を顕して、

横超の大誓願を光闡す。

広く本願力の回向によりて、

群生を度せんがために一心を彰す。

功德大宝海に帰入すれば、

かならず大会衆の数に入ることを獲。

蓮華蔵世界に至ることを得れば、

すなわち真如法性の身を証せしむと。

煩惱の林に遊んで神通を現じ、

生死の園に入りて応化を示すといへり。

本師曇鸞は、梁の天子、

恒に鸞の所に向かひて菩薩を礼したてまつる。

三蔵流支、淨教を授けしかば、

仙教を梵焼して樂邦に帰したまひき。

天親菩薩の『論』を註解して、

報土の因果誓願に顕わす。

往還の回向は他力による。

正定の因はただ信心なり。

惑染の凡夫、信心発すれば、

生死すなわち涅槃なりと証知せしむ。

必ず無量光明度に至れば、

諸有の衆生みなあまねく化すといへり。

【意 訳】

龍樹菩薩は難行は苦しいとあらわして、
樂しく往ける他力易行の船路を勧められ、

阿弥陀仏の本願を信ずれば、

仏力によつてただちに正定聚に入る。

ただよく恒に如来の名号を称えて、

本願大悲の恩を報ぜよと述べられた。

天親菩薩は『浄土論』を造つて説かれる。

何ものにも妨げられず救いたもう如来を信じ、

浄土の經典によつて真実を顕わし、

他力で速やかに救われる本願の法を広く示された。

広大な本願力のはたらきによつて、

衆生を救うために一心を明らかにされ、

功德広大な本願の法を信ずれば、

浄土の衆生の仲間に入り、

命尽きれば蓮華の世界に生まれて、

ただちに仏のさとりをひらき、

迷いの世界にかへつて不思議な力をあらわし、

自在に衆生を救うことができる」と述べられた。

本宗の祖師曇鸞大師は、梁の国王も尊んで、

つねにその方に向かつて「曇鸞菩薩」と礼拝された。

菩提流支三蔵から往生浄土の聖典を授けられ、

仙術の経を焼き捨てて浄土の法に帰入された。

天親菩薩の『浄土論』を註解して、『往生論註』を著し、

報土に生まれる因も果も願力によると明らかにされた。

報土に往生するのも迷界に還つて人を救うもの他力による。

仏となるべき身に定まる因は信心一つである。

惑いにけがれた凡夫も本願を信じさえすれば、

「迷いのままが悟りである」という仏果を得べき身となる。

かならず量りなき光明の浄土に往生すれば、

迷える人々を救う活動をするのであるといわれた。

道綽、聖道の証しがたきことを決して、ただ浄土の通入すべきことを明かす。万善の自力、勤修を貶す。円満の徳号、専称を勧む。三不三心の誨、懇勸にして、像末法滅同じく悲引す。一生悪を造れども、弘誓に値ひぬれば、安養界に至れて妙果を証せしむといへり。善導独り仏の正意をあきらかにせり。定散と逆悪とを矜哀して、光明・名号因縁を顕す。本願の大智海に開入すれば、行者まさしく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相応してのち、韋提と等しく三忍を獲、すなわち法性の常樂を証せしむといへり。源信広く一代の教を開きて、ひとへに安養に帰して一切を勧む。専雑の執心、浅深を判じて、報化二土まさしく弁立せり。極重の悪人はただ仏を称すべし。われまたかの撰取のなかにあれども、煩惱、眼を障へて見てたてまつらずといへども、大悲、倦きことなくしてつねにわれを照らしたまふといへり。

道綽禪師は、聖道の法は証りがたいと定め、ただ往生浄土の法のみが救われる道であると示された。自力の諸善を積む法をしりぞけて、功德の円満している名号を称えることを勧められた。三不信と三信とを示して懇ろにさとされ、いつの時代にも変わらぬお慈悲の法を明らかにされた。生涯悪を造つても、本願を信じ念仏すれば、安養浄土に往生して、妙なる仏果を証るといわれた。善導大師は諸師たちの中で、独り仏の正意を顕わされた。善い行いのできる人も極悪の人も共にこれを哀れみ、如来の光明と名号による救いを明らかにされた。広大な本願の智慧の海に入れば、行者は金剛堅固の信心を得て、法義を喜ぶ心がおけると同時に、韋提希夫人と同じく三忍をえて、浄土にいたって常樂のさとりを開く、と述べられた。源信和尚はひろく釈尊一代の教をたずねて、ひとえに弥陀の浄土を願ひ、世の人々を勧められた。専修念仏の信は深く、雑行雑修の信は浅いと分け、それによって趣く浄土に報土と化土の別があることを示された。極重の悪人は、ただ念仏をせよ。私も光明のなかにおさめ取られているが、煩惱にさえぎられて、その光明を見ることができない。けれども大悲は怠ることなく常に私を照らしてくださいと述べられた。

本師源空は、仏教にあきらかにして、
善悪の凡夫を憐愍せしむ。
真宗の教証、片州に興す。

選択本願悪世に弘む。
生死輪転りんぜんの家に還来かえることは、
決するに疑情をもって所止とす。
すみやかに寂靜無為じやくじやうむゐの樂みぎに入ることは、
かならず信心をもって能入とすといへり。

弘教の大士・宗師等、
無辺の極悪を拯済したまふ。
道俗時衆ともに同心に、
ただこの高僧の説を信ずべしと。

六十行すでに畢わりぬ。一百二十句なり

【意 訳】

本宗の祖師源空上人は、仏教を深くきわめ、
善悪すべての人々を哀れみ、
真宗のみのりを日本の国におこし、
本願の法をこの濁った世にひろめられた。
いつまでも迷いの世界にとどまるのは、
本願の法を信受しないからであり、
すみやかにさとりの世界にはいることは、
本願を信ずる一つによると述べられた。

真宗の教えをひろめてくださった祖師たちは、
すべての罪深い人々をお救いくださる。
出家も在家も今の世にある人々は共に、
ただよくこの高僧たちの説かれたところを信じなさい。

